

70. 日本占領下フィリピン周縁社会の抵抗と協力をめぐるビジネスと民衆暴力に関する研究

大月市立大月短期大学 経済科 教授 荒 哲

概要

本研究では、いわゆるフィリピン周縁社会から見たエリート以外のアクターによる日本占領研究をさらに発展させる形で、戦時下のフィリピン社会において様々なビジネス形態、とりわけ闇市やギャンブル事業などのインフォーマルな経済活動の中で蓄財した住民たちの動きに焦点を当て、その活動がどの程度、当該社会の社会変容に影響を及ぼしたかについて検証された。また、こうしたインフォーマルな経済活動の中で、抵抗や協力といった枠を超えて行動した人物がどのようなプロセスの中で生存し、それが戦後のフィリピン社会にどのような影響を与えるに至ったのかを究明した。いわゆる戦時下フィリピン社会における階級上昇とそれが当該社会にどの程度の変容を与えたのかに関する研究である。今回の研究活動では、東南アジア最大のスラムとして有名なマニラ市トンド地区においての面談調査を行い、同時に国立フィリピン大学中央図書館に所蔵されている「特別国民裁判」記録を掘り起こしながら、戦時下フィリピン社会で展開されたインフォーマルな経済活動に関わった人物関連の資料を発掘した。この文献調査では、かなりの成果を収めることができ、多くの記録資料を渉猟することができた。

背景および目的

この研究をするに至った背景や目的について述べることにする。本研究の大きなきっかけは、戦争という暴力的な空間における周縁の人々の動きが戦時下以降の社会変容のきっかけとなりうるのだろうか、という点を日本占領下のフィリピンを例に解明することにあつた。とかく、発展途上国の歴史は、支配する側は支配される側にどのような暴力を行使したか、そして、支配された側の住民はいかにこうした支配する側に対して抵抗し、自らを解放させていったかに、力点が置かれがちである。フィリピンを含む発展途上国の歴史記述の多くは、反植民地主義ないし反帝国主義の文脈に立った分析検証で占められがちであり、独立へ向けた国民国家統一という観点から、こうした傾向はある意味当然であつたといえることができる。

しかしながら、こうした歴史記述の傾向がある中で、歴史を大局的な視点からよりもむしろ、歴史を個々のアクターの動きに着目して再構成しようとする動きも学界には顕著になりつつある。歴史記述を、従来の政治的ないし経済的な視点だけにこだわらずに、社会史的な方法によって描こうとする動きが出てきている。本研究では、80年代後半期、インドの歴史学者、ラナジット・グハによって提唱されてきた「周縁」理論を適用し、同時に社会変革期において組織化されるやすいとされるギャングについてのホープズボームが提唱した「社会的盗賊」の理論を本研究に適用した。本研究では、戦時下フィリピン周縁社会で展開された暴力の特質と、それが戦後のフィリピン社会に如何に連続した暴力状況をもたらすに至ったのかを解明する研究の糸口になったのではと自負している。

これまでの成果

本研究では、面談調査と文献調査双方をフィリピンで行ったが、アメリカの公文書館で行うはずの文献調査は、本務校での学務が多忙を極め、スケジュール調整が困難となり、実行するに至らなかった。

まず面談調査の結果から報告する。面談調査においては、マニラ市トンド地区に在住し、かつてのフィリピンのロビンフッドと称されたギャングリーダー、アション・サロンガの甥へのインタビューに成功し、彼の叔父にあたるアション・サロンガがいかにして終戦前後より、当該地区において火器を修得し、自身のテリトリーを拡大しながら、インフォーマルな経済活動に関わってきたのかを解明することができた。本研究活動は、マニラで発行されている邦人向け新聞「まにら新聞」(2025年4月3日付)で紹介された。



図 1. 2025 年 4 月 3 日付「まにら新聞」

本研究を紹介した記事

また、国立フィリピン大学中央図書館においては、終戦直後、国事犯として裁判にかけられた、かつての対日協力者関連の資料を収集した。この史料収集は、他の研究テーマにおいても頻繁に行われてきたが、今回、戦時下のマニラにおいてインフォーマルな経済活動に従事した人々に関する資料も大量に収集することができた。本研究関連の資料も多く発掘できたが、以下の論文で触れた以外の数多くのケースについても慎重に吟味しながら検討していく。



図 2. マニラの伝説的ギャング、アション・サロンガ甥、ロミー・サロンガとの面談調査

2025 年 3 月 26 日、マニラ市トンドにて

以上の研究活動を元にして、二つの研究論文を京都大学東南アジア地域研究研究所発行の二つの雑誌、*Southeast Asian Studies* と「東南アジア研究」に投稿し、採択された。前者の雑誌に刊行された論文は、*Maneuvering between Resistance and Collaboration: Wartime Violence and the Informal Economy at the Margins during the Japanese Occupation of the Philippines* と題するもので、現在同研究所のサイトで早期公開されている。後者の雑誌には、英文とは違った角度からの分析であるが、やはり戦時下フィリピン社会から戦後復興にかけての暴力を中心に分析した和文論文、「フィリピン社会における「社会的盗賊」に関する考察—日本占領末期より戦後復興期にかけてのゲリラ、ギャングの活動を中心に—」『東南アジア研究』64 巻 1 号が近日に刊行され、やはりネット上において早期公開の予定である。

本研究をきっかけに、今後、終戦直後から頻発したフィリピン社会に横行する暴力の歴史的背景やその連続性についてより深い検討を行っていききたい。

今後の展望および課題

以上、1 年間という短い研究期間ではあったが、この研究助成援助により、最終的に刊行論文 2 本（いずれも査読論文）という具体的な研究成果を生むことができたことは幸いであった。今後ともフィリピン周縁社会に着目した研究を継続させ、今後は日本占領期に高揚した戦時暴力と、現代フィリピン社会に横行する暴力との関連性をより深く追究していきたいと考える。同時に、ジェンダーの文脈から見た日本占領史を考察しながら、従来のフィリピン史記述で等閑視されてきた、周縁社会における女性の歴史的役割についても検討していきたい。

(完)

発表論文

- 1) Satoshi Ara. *Maneuvering between Resistance and Collaboration: Wartime Violence and the Informal Economy at the Margins during the Japanese Occupation of the Philippines*. *Southeast Asian Studies*. Vol.15 No.1, 2026 年 3 月ネット早期公開。
- 2) 「フィリピン社会における「社会的盗賊」に関する考察—日本占領末期より戦後復興期にかけてのゲリラ、ギャングの活動を中心に—」『東南アジア研究』64 巻 1 号、2026 年 7 月刊行予定。

引用文献

- 1) ラナジット・グハ「植民地インドについての歴史記述」（竹中千春訳）『サバルタンの歴史：インド史の再構築』岩波書店、1998 年。
- 2) Eric Hobsbawm. *Bandits*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1969.